令和５年度山形県愛鳥週間ポスターコンクール
審査講評

新型コロナウイルス感染症対策の規制が緩和され、以前の生活に戻りつつある中、今年度も野鳥たちの生き生きとした姿が描かれた作品が数多く寄せられたことを大変うれしく思います。

小学校３１校、中学校２８校、高校６校から１９６点が出品されました。小学校の作品には、実際に野鳥を見つけたときの思いが伝わってくる作品や親子の様子をほのぼのと描いた作品など、見る側の気持ちが温かくなる作品がたくさんありました。中でも小学生の日本野鳥の会山形県支部長賞では、タンチョウが生まれて間もないヒナを育てている様子をのびのびと描いています。

中学生・高校生の作品は、野鳥の生息環境や山形の自然なども含めてていねいに細部まで描かれている作品が多かったです。中学生の山形県知事賞では、県の鳥でもある水辺にいるオシドリを題材にしていました。難しい配色ですが、水面の波紋や白を上手く使いオシドリが強調されるように工夫されていました。また、高校生の環境省東北地方環境事務所長賞では、人の視点から見たイヌワシが描かれていました。黒い影のみで描かれていますが、実際、空を見上げてイヌワシを見つけたときのリアルな様子が伝わってきます。また、日本野鳥の会山形県支部長賞では、絶滅危惧Ⅱ類にもなっているカンムリウミスズメを題材にしています。この鳥は一生のうちほとんどを海の上で過ごします。生まれたばかりのヒナが親鳥のそばにいる様子からもこの鳥についてしっかり調べて描いていることが分かります。

奨励賞や佳作など、このほかの受賞作品にも野鳥たちの生き生きとした姿が表現されていました。今回の審査全体を通して感じたことは、ぜひ実際に野鳥を見て欲しいということです。その時の印象や鳥の力強さなどが作品に表現できると思います。また、ポスターとしての役割も考慮して構図や配色を検討してみてはどうでしょうか。例えば文字を入れる場合は「愛鳥週間」「Bird　Week」がしっかり目立つように配色することでより完成度の高い作品になるものがあると思いました。

今回、専門家の方々から野鳥のことや自然環境のことなどについて話を聞きながら審査させていただきました。私自身学ぶことが多く、大変勉強になりました。今回のようなポスター制作をきっかけに若いうちから野鳥や周りの自然、野鳥を守るための活動にも興味を持っていただけたらと思います。そして私たち人間と他の生き物がどのように共生していけばいいのか、私たちを取り巻くさまざまな問題に向き合うきっかけになればと思いました。

東根市立第一中学校　教諭　横倉　希